

春の雪

首藤 静夫

句会、三月度の兼題は「春の雪」。東京地方は毎年二月下旬に寒波が来るので雪を期待したが形だけの雪に終わった。薔薇の芽に降りつもる雪で一句、と楽しみにしていたのだ。句の提出日が迫っている。仕方ない、今回も想像句か思い出句でいこう。

銀幕の健さんまぶし春の雪　しずを

高倉健ほど雪の似合う俳優は珍しい。掲句は健さん主演の任侠映画「唐獅子牡丹」のワンシーンをイメージした。♪義理と人情を秤にかけりや義理が重たい男の世界……。刑期を終えた健兄いがシャバに出て真面目に働いているところに、また勃発する縄張り争い。義理ある昔の親分のために一肌脱がざるを得ない健さん……。覚悟を決め、長ドス一本を下げて相手の屋敷に向かう。と、橋のたもとに思いがけず助っ人の池部良が佇む。無言で見かわす二人。心に沁みる場面だ。いざ切り込みに。件の主題歌が流れ、雪が二人の肩に降りかかる——いよっ、健さん！館内のヨイトマケの小父さんから声がかかる。

これを最初に見たのは昭和四十年代。池袋の盛り場の小さな映画館だ。拘置所にいる友人を見舞った帰りだったと思う。拘置所の緊張がとけ、ふらっと入った映画館は小父さん、小母さんで賑わっていた。

この雪は春の雪だろうと思う。はかなくて切なげで、義理と人情にぴったりする。雪をバックにした健さんの背中の刺青は華やかで同時に悲壮だった。健さんには「網走番外地」や「駅」「鉄道員(ぼっばや)」など雪がバックの作品が数多い。雪の静謐さと健さんのイメージが合うのだろう。

だから健さんにはあまり喋らせないほうがいい。寡黙な健さんの一言二言が効く。顔を大写しにし、少し不安そうな目を強調するのがいい。三船敏郎にも同じ事が言える。セリフはうまくないが、吹雪の中を去っていく後ろ姿など何とも言えぬ味がある。

春の雪には人それぞれの思い出がある。句会では、この句はゼロ票だった。しかし若いころの春の雪を思い出す縁となった。